



UDL 通信

新潟市立小須戸小学校

UDL 推進部

No.5

令和3年8月2日

研修特集 ①



UDL は学年も教科も越えて

7月8・9日の2日間公開授業を行い、1日目に中川先生によるPBIS研修、2日目に川俣先生によるUDL研修を実施することができました。バーンズ先生、川俣先生、中川先生には、これまでも小須戸小学校の実践に伴走していただき、オンラインで研修を受けてきましたが、今回は初の対面式の研修をすることができました。

今回のワークショップでは、2年生の国語と4年生の算数の指導案を用意し、参加者はどちらかの指導案を選び、予想されるバリアや、それを解消するための「提案」を考えました。参加者はそれぞれ違った「特徴カード」(右図)に基づいて予想されるバリアについて考えました。

それぞれ違った「特徴カード」に基づいたバリアや、それに対応した「提案」はカードの種類だけあるように感じます。しかし、自分の「特徴カード」に対応した「提案」を発表し、その「提案」をしてほしい人がいるか聞いてみると、複数の方の手が挙がりました。つまり、ある「特徴カード」の「提案」は、違う「特徴カード」にも対応できることを意味しています。一つの「提案」でも特徴が違った子どもたちに対応できることを体験的に理解することができました。また、一つの「提案」に対してすべての参加者が手を挙げることもなかったです。どの子にとってもよい万能な「提案」はないことも体験的に明らかになりました。さらに、今回のワークショップでは、学年や教科が違って、「特徴カード」に基づいたバリアに対応した「提案」について交流することができました。異なった学年の異なった教科でも同じ「提案」を適応することが可能ということに気がしました。

カリキュラムの障害のワーク：特徴カード

※指示があるまでこのカードの内容は他人に伝えないでください

あなたは、
話すのが得意だが書くのは好きではない
児童です

シェアするときには、上の□の内容は言わずに
どのような形なら授業案の授業に参加できるかを考えて

“私は～をしてほしいです”
“私は～のようにやりたいです”

という形で発表して下さい。

テクノロジーで UDL をアシスト！

26日午前の研修では、前半は川俣先生から NRT の分析の仕方について、後半はバーンズ先生からテクノロジーを使いこなせる学習者の育成について学びました。NRT の分析から学びを阻むバリアが見えてきました。それを改善するには、一律に苦手なところを反復させても得意にならず、それぞれの学び方を自分に合った学びに変えるアプローチが大事だということを再確認できました。UDL 通信No.4で詳しく載せたように、このアプローチは夏休み明けからの小須戸小の取組と一致しています。アプローチ例として、練習や確認の方法を複数用意したり、家庭学習を促し、その状況をフォローしたりすることが考えられます。しかし、それらを担任一人で実行するのは難しいです。そこで、テクノロジーの利用も重要であると理解できました。午後から各学年で NRT の分析をしました。分析結果は、Google Classroom から講師の先生に提出されました。提出された分析は講師の先生から添削していただき、8月3日の研修に活用する予定です。

9日の研修のポイント

- ① 一つのオプションでも特徴が違った子どもたちに対応できる。
- ② どの子にとってもよい万能なオプションはない。
- ③ 異なった学年の異なった教科でも同じオプションが適応することが可能。

26日の研修のポイント

- ① 自分に合った学び方に変えながら、バリアを解消していく。
- ② 練習や確認の方法を複数用意することで、より学びやすくする。
- ③ 障害の有無にかかわらず、誰もが学習へのアクセスをもてるようにする。
- ④ テクノロジーは、指導と学び方の柔軟性を具現化するために使う。
- ⑤ 即時にフィードバックでき、自己モニタを促す学習アプリの利用は重要。



図書室での NRT 分析